

槐

かい

岡井省二創刊

平成23年3月号

平成二十三年三月一日発行 第二十一巻第三号 通巻第三三七号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



百のぼうたん

高橋将夫

一瞬の时空のゆるみ氷柱落つ
山眠る寝返りひとつ打たずして
返りくるまでに箭も凍てにけり
霊場も刑場跡も冷ゆるなり

父思ひ出す雪垣の締め具合

観音の仮の姿の返り花

猩猩とつっいてゐたる牡丹鍋

大日と岡井省二と蕪蒸

岡崎大会

わびさびの粹を集めて冬の虹

森澄雄先生

夢の世に残りし百のぼうたんよ

白鳥とはるかな旅の途中かな

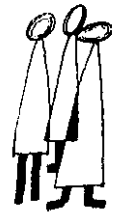
槐安集

水野恒彦

遠き日のケルトの裔^{えい}か縞臙
白鳥と戯れ一夜に銀の髪
たましいの重さ夕日の雪ぼたる
成層圏ぽんと晴れたり花八ツ手
冬三日月刺客と呼ばれたることも

延広禎一

葉牡丹の笑ひの渦を笑ひをり
とくとくと随喜の音色屠蘇の酒
魯田と天道大日如来かな
初護摩や大玉百合蒸しあがる
はるか比良鼈甲色の蜷かな



加藤みき

半眼にまみえてゐたる初日影
はばぬけを甘受甘受や初鴉
蒸饅頭右手に左手に持ち替へる
繭玉のひとつひとつのこゑを聞く
搔き分けて海に会ひたり龍の玉

石脇みはる

でこぼこに生きてる冬至南瓜かな
ぬくぬくと籠り心や牡蠣フライ
牛舌とブロッコリーや十二月
年の夜や肌つまむごとつるし柿
足元をみつめ直すも師走かな

中島陽華

馬油屋はこの突き当り夕紅葉
秋の翳献上博多の札入れに
人の世のてっちり鍋に白子あり
三日かな鱧鱈のんどを通りける
暖かや楓の杖をおろしける

竹内悦子

桃色の手帳買ひをる十夜かな
霜月やむらさき色に暮れにける
南座に誘はれてをり近松忌
心電図冬の稲妻みてねまる
今朝の春宇宙に神と佛かな

栗栖惠通子

去年今年線路に耳をあててをる
初夢の醒めたる耳朶でありにける
三つ指でつまんで祖父の冬帽子
凍滝を見上げてゐたる喉仏
白毫に紅させる初日かな

大島翠木

仏頭のうすら寒さをみぞおちに
ポイントセチア臍も思ひも熱かりし
鈍感のふりして朴の冬木の芽
点滅し全身で笑ってゐる聖樹
然もあらばあれ極月の赤き橋

雨村敏子

シリウスや黒潮の幅百キロに
ぶつかつて大きく廻る宇宙独楽
鬼灯の枯れて緋色の深くなる
悌や臍につながらる去年今年
母がゐて媪もゐたり福寿草

小形さとる

雲と来てなほ氣散じの冬河原
極月の「はとバス」などを想ひをる
龍の玉無聊なかなか佳かりける
報恩講日向の人にもの間はむ
初雪も入れ万病の湯なりけり

本多俊子

寒の星この世は男と女かな
刀豆の色を置きたる虚空かな
一本の冬木の音を聞きにゆく
うなそこに眠むる艦あり冬日かな
鯛の鯛心充ちたる年忘れ

久津見風牛

裸木は確と青空つかみをり
水面鏡しばらく吾をはなさざり
繩屑を拾ひ雪吊り見上げたる
炬燵穴うつぼが軒かいてをり
古代よりねこなで声あり冬薔薇

近藤 きくえ

如意棒をひと振りしたき大枯野
叡山の彩をふかめて眠りけり
シリウスや夢見の鐘のひびき祝ぬて
大日の波動に集ふ四温晴
土の上になほ凜として落椿

近藤 喜子

枯野 ゆく我も光の一粒子
椅子深く掛け鯨鳴く夜と思ふ
数へ日や剣の舞の夢にまで
夢のなか冬蝶どこまでも行ける
狐火となるかも届かざる想ひ

谷村 幸子

てのひらに金平糖や漱石忌
日溜りに白き山茶花涅槃像
柎の花匂ひくる夜明けかな
冬木立 幼子歩む影長し
湯立て神事太鼓をうってはやしけり

瀬川 公馨

オリオンの火の粉の海に墮ちにけり
六曲一双潮吹き上ぐる鯨かな
花八ツ手記者会見に臨みたる
老猿を追ふて行きけり櫛紅葉
けふあたり禁裏走るや嫁が君

久保東海司

葦枯れて川の流れを早めたり
銃眼の視野ことごとく枯野かな
枯裾野山彦還り易くなる
折鶴にひと吹き息の白きこと
冬麗の鯉挑ねる音障子越し

松原仲子

暁光をこぼさぬやうに寒鴉
天上に種火をさがす狸かな
ふと覚めて冬の銀河につきあたる
狐啼く夜は煌煌と月ひとつ
山国のまた粧へる氷かな



槐市集

江島照美

急ぐ身にあらねど急ぐ夕時雨
絵の具では出せぬ濃淡落葉舞ふ
肩に乗るインコと語る日向ぼこ
椎の実の拾はれぬまま散らばれり
松園の画に魅入る夜や雪女

金澤明子

寒風や家計簿付きの新手帳
お謡の本の葉の櫛落葉
昼は書に夕は孤食に椅子炬燵
植物園日向ぼつこの二三人
新曆大黒柱に釘ひとつ

熊川曉子

校庭にサッカーボールひとつ冬
着ぶくれて体操らしきことをする
ゆつくりと生きてゆけよと霜のこゑ
冬至湯のよるこんでゐる肘ゑくぼ
煮凝の魚の眼にあるきのふかな

桑原逸子

冬ぬくし浮世離れし媪ゐて
神帰る檜皮寄進を致しけり
慈善鍋合唱団の千の風
冬日向ヴィタミンDを肌より
東京の暮しに慣れて根深汁



槐集

高橋将夫選

存亡の一戦きありけり鷹の声
寢屋川 前田美恵子

陣を張る家康公の大銀杏

寒の水抱きし龍の眠りかな

寒雷や果またては何処法螺の穴

亀石の手足伸びをる冬日かな

枯野には地球のまはる響きあり
守口 柳川 晋

恐竜の眼差にして鷓鴣

言霊の色は紅寒やいと

卷狩を言葉の森に仕掛けたる

ビッグバンより取り置ける鬼火かな

十二月発光体のピルの街
枚方 中野 京子

寒林の真空地帯に入りにつけり

黄昏の明るさ残し年うつる

玉ねぎの苗立ち上がる地の力

日本が隅にある地図日向ぼこ

冬晴の金剛生駒肩を組む
守口 岩下 芳子

天狼や北京放送聞こえたる

髪逆立つ円空仏の息白し

ブロンズの裸婦像洗ふ年の暮

日の本のいづれの浦も年用意

どんな夢咲かせてくれる冬木の芽
岡崎 岩月優美子

語らむと吾に寄り添ふ冬蝶よ

裸木や寡黙に人の通り過ぐ

マンネリの吾に寒星突き刺さる

冬天や神の降り来る樹でありし

はじめての日や寒牡丹ひらきたる
安城 近藤 公子

アタモの雪ははのしぐさを憶ほゆる

裸木や自我砕かれてしまひたる

手に足に冬の貼り付きじんじんす

金属音たて霜の花ひかりをる

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

亀石の手足伸びをる冬日かな 前田美恵子

日溜りでのんびりと亀が日向ぼっこをしている情景を思い浮かべると、なるほど、亀石まで手足が伸びてくるという作者の気持もよく分る。他に〈存亡の一戦ありけり鷹の声〉〈陣を張る家康公の大銀杏〉〈寒の水抱きし龍の眠りかな〉〈寒雷や果ては何処法螺の穴〉の句がある。「存亡をかけた鷹の争い」「陣を張る家康公の大銀杏」「寒の水を抱いて眠る龍」「法螺貝の穴の果て」には、それぞれ作者の思いが込められている。作者ならではの視点がある。

ビッグバンより取り置ける鬼火かな 柳川 晋

宇宙はビッグバンにより始まったという説は知っていたが、鬼火もその時の火の玉から発生したとは今まで知らなかった。宇宙に魂がもしあるなら、ロボットも心をもつかもしれない。〈巻狩を言葉の森に仕掛けたる 晋〉

玉ねぎの苗立ち上がる地の力 中野 京子

玉ねぎの苗は横向きに寝かせて植えるのだそうだ。しばらくすると直立して上に向かって伸びてくる。引力に逆らっているのかもしれない。いや、作者のいうように「母なる大地の力」なのだろう。

冬晴の金剛生駒肩を組む 岩下 芳子

金剛山と生駒山が並んでいる冬晴れの景。「肩を組む」の措辞が絶妙。山が並んでいるだけの即物的な景に心がかよった。作者の人の柄のしからしめるところだと思ふ。

どんな夢咲かせてくれる冬木の芽 岩月優美子
来るべき春を夢見て、冬木から芽がそと顔をのぞかせている。春にはどんな花を咲かせてくれるのだろうか。「どんな夢咲かせてくれる」の措辞は作者ならではのもの。

金属音たて霜の花ひかりをる 近藤 公子
霜がキラキラ光っている情景。「金属音たて」は作者ならではの感性。〈手に足に冬の貼り付きじんじんす〉もまた然り。

雪の降る十字架の無き吾がクレド 西村 純太
クレドは信条。作者の信条はまだ十字架を背負うほど確固たるものではないという。降りしきる雪の中にある心境だという。

十粒ほどの零余子握らせ別れたる 近藤 紀子
「十粒ほどの零余子を握らせて別れた」という別れは一体どんな別れだったのだろうか。少なくとも悲恋の別れではなからう。いろいろ想像されるところが面白い。

裸木にとび交うてをる木霊かな 谷岡 尚美
裸木となつて木の精霊も何ら包み隠すところなく、楽しく交歓しているであろう。(以下略)